



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポロスは論駁されなかったか : Gregory Vlastos, "Was Polus Refuted?" (1967) 批判
Author(s)	田中, 享英
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 103, 1-40
Issue Date	2001-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33993
Type	departmental bulletin paper
File Information	103_PR1-40.pdf



ポロスは論駁されなかったか

— Gregory Vlastos, “Was Polus Refuted?” (1967) 批判 —

田 中 享 英

一 はじめに

プラトンの『ゴルギアス』にはたしかに辛辣すぎるところがある。この作品のソクラテスは、得意の論駁法によって対話相手の説をつぎつぎと否定し去り、最初から最後まで自説を押し通す。この対話篇を読んだおかげでソクラテスが大嫌いになったという若者はけっこう少なくない。しかし若者たちがソクラテスを嫌いになるのは、ソクラテスについての無理解と誤解によるところも少なくない。若者たちがプラトンを読むのは、そこから何か新しいことを学ぶためであろう。自分が知らなかったこと、自分が考えなかったこと、これまでの自分の考えと異質なものを、そこから学びとるためであろう。しかしそのようなものを理解することは容易でなく、とかく誤解に陥りやすいことも、いわば理の当然であろう。「犬は見知らぬ者に吠えかかる」とヘラクレイトスは言った。理解ができないとき、若者は

ポロスは論駁されなかったか

プラトンのソクラテスを恐れ、悪罵し、ソクラテスに背を向ける。

これは残念なことではないだろうか。若者たちの誤解を解き、理解を助けること、そして彼らのソクラテスへの信頼を回復することは、われわれプラトン研究者のつとめであろう。それができないとしたら、プラトン研究者は存在理由を失うことになるだろう。まして、われわれプラトン研究者が、若者たちと声を合わせてプラトンに吠えかかるとしたら、若者たちはどうなるだろう。それともわれわれは、プラトンについてのわれわれの無理解をさらけ出し、プラトンに噛みついてみせることによって、反面教師として若者たちを教え導くことができるのだろうか。若者たちはわれわれの醜い振舞いを見て、却って義憤を呼び覚まされ、プラトンへの敬愛の心を確かなものに育てることができのだろうか。少なくとも私にはそうは思われない。若者はその無理解に気づかず、醜さを醜さと気づくこともなく、むしろそれを立派なことと受け取るだろう。

私には、今世紀最大のプラトン学者の誉れ高いグレゴリー・ヴラストスが、しばしば、そのような反面教師を以て自ら任じていたように思われてならない。少なくとも彼が多くの場合において「プラトンの誤謬」を暴露し批判することを自らの使命と心得ていたことは多くの人々が認めるだろう。彼はおそらくそれによって、プラトンを安易に理解してしまうことを自他に対して戒めたのであろう。言い換えれば彼は、ソクラテスに倣って、プラトンについてわれわれ研究者がいかに無知であるかを知らしめようとしたのであろう。この点で、ヴラストスの功績の偉大さは誰にも否定できない。しかしヴラストスとソクラテスは、似てはいるが、大きな違いがある。それはソクラテスがどんな対話相手についても、相手に対する想像力（思いやり）を働かせることができたこと、そして対話相手が誤謬と矛盾に陥っても、それを同時に自らの無知として引き受け、相手を決して断罪しなかったことである。それに対してヴラ

ストスは、少なくともその表面を見る限り、いわば彼の対話相手であつたプラトンへの想像力を示すことなく、自分の基準で相手を断罪してしまつた。

この違いは、ヴラストスに同情して言えば、対話と論文の違いなのかもしれない。プラトンのソクラテスは、対話によつて実際に相手の意見を聞き出すことができたし、その意見の意味するところを何度も重ねて相手に聞きたたすことができた。しかしヴラストスは、プラトンのテキストの意味をプラトンに聞きただすわけにはゆかず、ただ彼自身の想像力のみに頼つた一方的な解釈を論文として発表する他はなかつた。またソクラテスは、相手を論駁した後で、ソクラテス自身の無知を告白する機会があつたが、ヴラストスは、プラトン論駁を試みた自分の論文の末尾に、自分のその論駁についてもさらに再考が必要であるなどと付言するわけにもゆかなかつたであらう。このように見るなら、ヴラストスの醜さは、研究論文という、われわれ研究者すべてが共有する哲学のスタイルに本質的に内在する醜さであると言えるかもしれない。

しかしもしそうであるなら、われわれは何らかの形でそこに対話を回復しなければならぬだろう。その一つの形は、プラトンを論駁したヴラストスをさらに論駁することであらう。そしてそのような形で、プラトンに対するわれわれの想像力を回復することを試みることであらう。以下は、そのような私の試みの一つである。

私が取り上げるのは、ヴラストスの「ポロスは論駁されたか」と題する論文¹である。この論文でヴラストスは、プラトンの『ゴルギアス』474C-475Eにおいて、ソクラテスは対話相手のポロスを論駁したことになっているが、よく調べてみるとそのソクラテスの論駁には論理的虚偽が含まれており、したがつてポロスは実際には論駁されてはいないのだと主張している。これに対して私の論旨は、ヴラストスの主張は、二人の対話の文脈を無視して解釈したこと

ポロスは論駁されなかったか

に由来しており、ソクラテスの論駁には論理的虚偽は存在せず、やはりポロスは論駁されたのだと反論するところにある。

二 不正を行うことは不正を受けることよりも損害であり不幸である

まず、問題の部分『ゴルギアス』474C-477Eの対話を、日本語訳で見ておこう。(以下の引用で「」内は訳者が補った説明である)

ソクラテス さあ、それでは言ってくれたまえ。ぼくはもう一度始めから、君に訊ねて行くというふうにしてみるからね。君にはどちらが、よりわるい「損害であり、不幸である」ことであると思われるかね、ポロス、不正を行なうほうかね、それとも、受けるほうかね。

ポロス それはむしろ、不正を受けるほうです。

ソクラテス それならしかし、どうだろうか。より醜い「卑劣であり、非難に値する」のは、どちらかね。不正を行なうほうかね、それとも、受けるほうかね。答えてくれたまえ。

ポロス それは、不正を行なうほうです。

ソクラテス それではまたそのほうが、よりわるい「損害であり、不幸である」ことでもあるのだ。いやしくも、より醜い「卑劣であり、非難に値する」からには。

D
ポロス いえ、決してそんなことはありません。

ソクラテス ああ、それでわかったよ。君はどうやら、美しい「立派であり、称賛に値する」こととよい「利益であり、幸福である」ことは同じではないし、また、醜い「卑劣であり、非難に値する」こととわるい「損害であり、不幸である」ことは同じではない、と考えているらしいね。

ポロス もちろん、同じではありません。

ソクラテス しかしそれなら、次のことは、どう考えるかね。すべて美しい「立派であり、称賛に値する」もの、たとえば、身体でも、色でも、形でも、声でも、また風俗習慣でも、それらのものを君は何の基準にも照らすことなしに、それぞれの場合に美しいと言うのかね。たとえば先ず、身体をとりあげてみれば、君が美しい「立派であり、称賛に値する」身体を、美しいと言うとき、それは有用性の点で、つまり、それぞれの身体が何かのために役に立つとすれば、それとの関係を見て美しいと言うのではないかね。あるいは、ある種の快樂の点で、つまり、その身体が眺められるときに、眺める人たちを喜ばせるなら、その点で美しいと言うのではないかね。どうかね、身体の美しいことについて語る場合に、何かそれら以外の観点をあげることができるかね。

ポロス いえ、できません。

E
ソクラテス それではまた、その他のどんなものについてでも、同じことが言えるのであって、つまり、形でも色でも、それらのものに君が美しいという名をつけて呼ぶ場合には、それはある種の快樂のためか、それとも有益さのためか、もしくは、それら両方のためではないかね。

ポロスは論駁されなかったか

ポロス そのとおりです。

ソクラテス それは声の場合でも、またすべて音楽に関係のあるものの場合でも、同じことではないかね。

ポロス そうです。

ソクラテス さらにまた、法律や風俗習慣の方面のことにしても、およそ美しい「立派であり、称賛に値する」ものは、むろん、いま言われたような観点、つまり有益なものであるか、快適なものであるか、それとも、それら両方のものであるかという、そういった観点を抜きにしてはあり得ないだろう。

ポロス あり得ないと思います。

ソクラテス それではまた、学問の美しい「立派であり、称賛に値する」ことについても、同様ではないかね。

ポロス まったくです。それに、いまあなたが試みておられる定義の仕方だって、ほんとうに美しい「立派であり、称賛に値する」ものです、ソクラテス。美しいということを定義するのに、快樂とよき「有用性」とによってなさっているのですよ。

ソクラテス それなら、醜い「卑劣であり、非難に値する」ことのほうは、その反対のもの、つまり苦痛とわるさ「損害」とによって、定義されるのではないか。

ポロス それは必然にそうなります。

ソクラテス そうすると、二つの美しいもののうちで、その一方がより美しい場合には、そのもののほうが、いま言われた二つのうちのどちらかの点で、またはその両方の点でまさっているから、それでより美しいのだ、ということになるね。つまり快樂の点で、あるいは有益さの点で、もしくはその両方の点でまさっているから、そうなのだね。

B
ポロス たしかに。

ソクラテス しかしまた反対に、二つの醜いもののうちで、その一方がより醜い場合にも、そのもののほうが、苦痛の点で、あるいはわるさ「損害」という点で、まさっているから、それでより醜いのだ、ということになるだろう。どうだね、これは必然にこうなるのではないかね。

ポロス そうなります。

ソクラテス よし来たゝさあ、それでは、不正を行なうのと、不正を受けるのについて、先ほどはどんなふうに言われていたかね。不正を受けるのはよりわるい「損害であり、不幸である」ことであるが、しかし不正を行なうほうがより醜い「卑劣であり、非難に値する」ことであると、こう君は言っていたのではないかね。

ポロス ええ、そう言っていました。

ソクラテス それなら、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、より醜いのだとすると、そのほうがより苦痛なことであり、それで苦痛の点でまさっているから、より醜いのであるか、あるいはわるさ「損害」という点でまさっているからそうなのか、あるいはその両方の点でまさっているからそうなのか、そのどれかであるということになるのではなからうか。このことも必然にこうなるのではないかね。

ポロス それも必然にそうなります。

C
ソクラテス それではまず最初に、こういう点について調べてみることにしよう。はたして、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、苦痛の点でまさっているのか。つまり、不正を行なう人たちのほうが、不正を受ける人たちが

ポロスは論駁されなかったか

りも、もつと苦痛を感じているのか。

ポロス いや、ソクラテス、少なくともそういうことは、ぜったいにありません。

ソクラテス してみると、少なくとも苦痛の点では、まさっていないのだね。

ポロス ええ、決して。

ソクラテス それなら、苦痛の点でまさっていないとすると、もはや両方の点でまさるということもありえないだろう。

ポロス ありえないようです。

ソクラテス それでは、残るところは、もう一方の点で、ということになるね。

ポロス ええ。

ソクラテス つまりそれは、わるさ「損害」という点で、ということだね。

ポロス そうらしいです。

ソクラテス そうすると、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、わるさ「損害」という点でまさっているのなら、そのほうが、よりわるい「損害である」ということになるう。

ポロス むろん、そうなります。

D
ソクラテス さて、不正を行なうほうが、不正を受けるよりも、より醜い「卑劣であり、非難に値する」ということは、世の多くの人たちによつても認められているし、君によつてもまた、さきほど同意されていたのだ。どうだね、そうではなかったのかね。

ポロス そうでした。

ソクラテス そして今や、そのほうがよりわるい「損害であり、不幸である」ということが、明らかにされたのだ。
ポロス そうらしいですね。

ソクラテス それなら君は、そのよりわるい「損害であり、不幸である」ことで、より醜い「卑劣であり、非難に値する」ことのほうを、そうであることのより少ないものよりも、選ぶのだろうか。さあ、躊躇しないで、答えてくれ、ポロス。君がそれに答えたからといって、何もほんとうの損害を受けるわけではないのだから。いや、君は男らしく、ちやうど医者に身をゆだねるようなつもりで、この議論に身をゆだねて、答えてくれたまえ。そして、ぼくの訊ねていることを肯定するなり、または否定するなりしてくれ。

E
ポロス いや、もちろん、選びはしませんよ、ソクラテス。

(『ゴルギアス』 474C-475E)

三 議論の構成

つぎにこの議論の構成を見ておこう。ここに引用した対話は、ほぼ明確に三つの節に分けることができる。すなわち、第一節：ポロスの意見の確認(474C-D4)、第二節：準備的考察(474D5-475B4)、第三節：論駁(475B5-E1)、である(ここの行数は訳文のもの)。

まず第一節ではポロスの意見が確認される。その一つは、

ポロスは論駁されなかったか

(1) 不正をされることは不正をすることよりも損害である

という意見(本文の訳では「損害である」ではなく「わるい」を用いたが、この日本語の語感から来る誤解を避けるために、以下の考察では「損害である」を用いる)、もう一つは、

(2) 不正をすることは不正をされることよりも醜い

という意見である。前者(1)は、ソクラテスがまさにこれから論駁する標的となるものである。これがポロスの意見であることは、これまでの対話によって、ソクラテスにはよく分かっている。これに対して後者(2)の方は、いまここで初めてソクラテスがポロスから聞きだした意見である。ソクラテスは、この意見(2)を基礎に置き、ここから出発して、さきほどの意見(1)を論駁することになる。

第二節は論駁のための準備作業である。ソクラテスの目論見は、ポロスの意見(2)の「醜い」を、最終的には「損害である」に置き換えさせるところにある。そのための下準備としてかれは、ポロスに、

(3) 人々が「美しい(立派であり、称賛に値する)」と呼ぶものは、「有用な」ものか「快い」ものか、あるいはその両方であつて、それ以外にはない

ということ、そして、

(4) 人々が「醜い(卑劣であり、非難に値する)」と呼ぶものは、「有害な」ものか「苦痛な」ものか、あるいはその両方かであつて、それ以外にはない

ということを認めさせておくのである。この準備作業につづいてソクラテスは、さらにこの(4)を、

(5) 二つの醜いもののうちで、その一方がより醜いならば、それはそのものの方が苦痛の点でまさっているからか、

あるいは損害の点でまさっているからか、あるいはその両方の点でまさっているから、それで醜いのであるという言明の形に言い換えているが、この言い換えは、あらかじめポロスの意見(2)への適用を予定した、もう一段の準備であることは明らかであろう。

こうしておいてソクラテスは、いよいよ第三節で、ポロスの論駁に取り掛かる。ここでももちろんソクラテスは、一問一答の対話によってポロスの意見を聞き出しているのだが、論理の骨組みを見るために、いま、ポロスの意見のみを羅列した形で示してみよう。

(2) 不正をすることは不正をされることよりも醜い

(6) 不正をすることが不正をされることよりも醜いのは、「前記(5)により」不正をすることが不正をされることよりも、損害の点でまさっているからか、あるいは苦痛の点でまさっているからか、あるいはその両方の点でまさっているからかの、いずれかによって、より醜いのである

(7) しかるに、不正をすることは不正をされることよりも、苦痛の点でまさっていることはない。つまり、不正をする人たちの方が不正をされる人たちよりも、もっと苦痛を感じているということはない

(8) したがって、不正をすることは不正をされることよりも、苦痛と損害の両方の点でまさっていることはない

(9) したがって「(6)(7)(8)により」、不正をすることは不正をされることよりも損害の点でまさっている

(10) したがって、不正をすることは不正をされることよりも損害である

この(10)は、ポロスの意見(1)の否定になっている。つまりソクラテスは、ポロスの意見(2)から出発し、その論理的帰結としてポロスに意見(10)を認めさせ、これによってポロスの意見(1)を論駁したのである。

ポロスは論駁されなかったか

四 ヴラストスの指摘する「論理的虚偽」

われわれがこの論駁を読むとき、ここから受ける第一印象は、ポロスがあまりにも簡単に、あっけなく論駁されてしまったという感想であろう。ポロスの意見(1)は、常識からすればほとんど当たり前の考えであり、多数の人の支持を得ている思想である。それがわずかに二、三ページの、これほど簡単な論理によって覆えられてしまつてよいものか。しかもそのあげくにポロスが認めさせられる羽目になつた意見(10)はといえば、ほとんど常識とは正反対とも言えるパラドックス(逆説)ではないか。ソクラテスの論理はあまりにも一方的に見えるし、ポロスはあまりにも素直に引き下がつてしまつたように見える。

こうした印象から、次にわれわれ一般読者に思い浮かぶのは、この論理的推論ははたして成立しているのだろうかという疑惑である。たしかに、ソクラテスとポロスの二人の間でなされた対話としてこれを見るかぎり、ポロスが論駁されたことは明らかである。なぜなら、ポロス自身が、自分の意見(1)とは反対の意見(10)が成立することを、最終的に認めたからである。つまりこの対話を、ソクラテスのポロスに対する説得としてみるかぎり、ポロスの納得によつて説得は成功し、論駁は完了している。しかし個人が個人を説得したとしても、その説得が論理的であるとは、必ずしも限らないのではないか。対話している当人同士は自分たちの対話が論理的推論になつていふと思つていても、その推論が実際には論理的に誤つてゐる、つまり論理的虚偽を犯しているということがありうるからである。しかもそのとき、説得する者が故意に虚偽を犯す場合もありうるし、過失によつて虚偽を犯す場合もありうるだろう。しかし

いずれにしても、そのときその論理は成立していないことになる。そしてもしそうだとすれば、われわれにとって彼らのこの論理的考察は何の参考にもならず、何の役にも立たないということになりかねない。ではたして、ソクラテスとポロスは、この対話の中で論理的虚偽を犯しているのか、いないのか。

グレゴリー・ヴラストスは、ソクラテスがこのポロス論駁において論理的虚偽を犯していると指摘する。それは次の点においてである。

ソクラテスはこの論駁において、まずその準備作業として、「美しい」ことが「有用である」ことと「快い」ことによって定義され(3)、「醜い」ことが「有害である」ことと「苦痛である」ことによって定義される(4)ことをポロスに認めさせ、その上でこの定義を「不正をすること」と「不正をされること」についての議論に適用するという戦略をとっている。ところが、ヴラストスによれば、この適用の段階で論理のすり替えが起こっている。というのは、まず「美しい」ものは「有用である」か「快い」か、あるいはその両方であるかと、ソクラテスとポロスが定義したとき、その「快さ」とは、ソクラテスの言葉(474D)を読み返せば分かるように、その美しいものを「眺める人たちにとって」の快さであった。ここからすれば、「醜いもの」が、「有害である」か「苦痛である」か、あるいはその両方であるかである、と定義されたときも、その「苦痛」とは、その醜いものを眺める人にとっての苦痛でなければならぬ。ところがソクラテスは、この定義を適用する段になると、「不正をすることの方が不正をされることよりも苦痛の点でまさっているのか。つまり、不正をする人たちの方が不正をされる人たちよりもっと苦痛を感じているのか」(475C)と、ポロスに問うている。つまり、本来なら「不正をすることが不正をされることよりも醜いのは、不正をすることの方が不正をされることよりも、それを眺める人にとって苦痛であるからか」と問わなければならない

ポロスは論駁されなかったか

かったのに、ソクラテスの問いは「不正をする人にとって苦痛であるか」という問いになってしまっている。ここに論理のすり替えがある、とヴラストスは言うのである。つまり、このように、「不正をする人たち（本人）の方が不正をされる人たち（本人）よりももっと苦痛を感じているのか」と問われれば、だれだってポロスがしたように、「そんなことは絶対にあリません」と答えるだろうが、「不正をすることの方が不正をされることよりも、それを眺める人にとって苦痛であるか」と問われた場合には、返ってくる答えは、せいぜいのところ、「どちらとも言えない」という答えであつて、ポロスにしても、そう答えただろう、そしてポロスがそう答えたなら、ソクラテスの論駁は成立しなかったはずである、というのがヴラストスの指摘である。²

ヴラストスのこの指摘は、「苦痛」が誰にとつてのものであるか、言い換えれば「苦痛」の関係項のすり替えを問題にするものである。たしかに一般的には、このようなすり替えがなされるとき論理に虚偽が生ずるであらうことは、容易に理解される。例えば「この自転車は子どもにとつては大きすぎる。だから、この自転車は子どもにとつては危険である」という推論は、「子どもにとつて」という限定すなわち関係項が保たれてはじめて成り立つ推論であり、この関係項を削除したり、別の関係項に置き換えてしまった場合には、推論が成り立たなくなる。また同様に、「AはBよりも大きい、ゆえにBはAよりも小さい」という推論は成り立つが、「AはBよりも大きい、ゆえにBはCよりも小さい」という推論は明らかに成り立たない。したがつて、もしもソクラテスがポロス論駁の過程でこのような関係項のすり替えを犯していたとしたら、ソクラテスの論駁は当然その有効性を疑われなければならない。ではソクラテスがそのようなすり替えを犯したというのは事実だろうか。もともとソクラテスは、「美」と「醜」の定義に際して「快」と「苦」を「眺める人」に関係づけていたのだろうか。

五 関係項——誰にとつての快苦か

チャールズ・カーンのヴラストス批判 ヴラストスは、ソクラテスの「美」の定義にその構成要素として含まれていたはずの「眺める人にとつての（快）」という限定を見落としさえしなければ、ポロスは論駁されずに済んだはずだと論じたが、これに対してチャールズ・カーンは、この限定は定義の構成要素ではなく、「身体」「色」「形」など、定義を導くための例として提示されたものの要素にすぎないと反論する。また「快」はたしかに「だれかにとつての（快）」であるには違いないにしても、それがもつばら、あるいは最も主として「眺める人にとつての（快）」であるなどとは、ソクラテスはどこにも一言も言つてはいないし、含意してもいないとカーンは言う。それどころか、その後に挙げられる「法」や「学問」の例については、それらが「立派である（美しい）」と言われるのは、無関心で中立的な傍観者から見て快いからではなく、むしろそれらの法のもとで生活する市民や学問にたずさわる学生など、「当事者(participants)」にとつて「喜ばしいからである、したがつて最初の二三の例のみにこだわらず、挙げられている例の全体を見れば、「快」は「眺める者にとつての快」であるのとまったく同程度に「当事者にとつての快」でもありうるというのがカーンの主張である。

カーンのこの反論は正しいと思われる。カーンも認めるように「快」は「だれかにとつての（快）」でなければならぬ——つまり関係項が存在しなければならぬ——が、それは「眺める人にとつての（快）」である必然性はない。たしかに、たとえば「学問」については、学問という活動にたずわる「本人にとつての（快）」であつてもよいのであ

ポロスは論駁されなかったか

る。ヴラストスは関係項の把握を誤ったと言わなければならない。

さてしかし、「快」は「だれかにとつての（快）」でなければならない。とすると真の関係項は何であることになるか。カーンは、上記のようにヴラストスに反論した後で、「だれにとつて（快である）か」の解釈については自由に開かれていて、その場合場合にに応じて適切に空所を充当することができると主張する。しかしこのカーンの主張は寛容ではあるが、意味をなさない。というのはこの主張は、関係項については特に限定はなく、何（あるいは誰）であってもよいという主張であるが、ここからは必然的に、関係項は削除されようが、別のものに置き換えようがかまわなという結論が——カーン個人は否定するであろうが——出てきてしまうからである。関係項を認めなければならない以上は、それを限定された一定のものとして認めなければならない。われわれの仕事はその関係項を探し出すことである。美しいものが快いのは誰にとつてであるか、醜いものが苦痛であるのは誰にとつてであるか。

「美しい」と言う人——美醜の判定者　われわれが何かを見て「美しい」と言うとき、その何かは「有益なもの」か「快いもの」かであろうというのが、ソクラテスの提案する「美」の説明であつた。ポロスはこの説明を理解した。しかしわれわれもまた、これを理解することができないのではないか。ではわれわれはこれをどう理解するか。ここでわれわれはしばらくヴラストスやカーンの論理学的な論争から身を引き、もう一度初めからわれわれ自身で事柄そのものを考察しなおそう。

われわれが何かを見て「美しい」と言うとき（あるいは「立派である」と言うとき）、われわれはその何かを「快い」と感じているということが確かにある。そのようなとき、「快い」のは「だれにとつて（快いの）」か。言うまでもない、「われわれにとつて」である。「われわれ」がそのものを「快い」と感じ、そして「美しい」と言うのである。で

は求めていた関係項は「われわれ」であるか。この場合はそうである。しかしいつも「われわれ」であるわけではなく、それは「君」である場合もありうるし、「ポロス」である場合もありうる。したがって「われわれ」という把握の仕方は、間違いないが正しくない。では正しく把握するにはどうすればよいか。それは、われわれがそれを「われわれ」であると考えたのはなぜであったか、その根拠を振り返ってみればよい。いまの場合その根拠とは、美しいものを見て「美しい」と思い、「美しい」と言ったのが「われわれ」だったところにある。つまり、「われわれ」とは、「美しい」と思い、美しいと言った人のことだったのである。そしてそれは、さらに言い換えれば、「美しい」と判定した「判定者」だったのである。美しいものが「快い」のは、その美しいものを見て「美しい」と思い、「美しい」と言う、その「判定者にとって」快いのである。（そして、醜いものが「苦痛である」のは、その醜いものを見て「醜い」と思い、「醜い」と言う、その「判定者にとって」苦痛であるのである。）

「プラストスの「眺める人」について われわれはいま、美しいものが「快い」のは誰にとってであるか」と問い、その関係項が「美しいと言う人、すなわち判定者」であることを探り出した。ところで「美しいと言う人」は、当然、美しいものを見て美しいと言うのである。とすればそれは、「美しいものを見る人」であり、つまり「美しいものを眺める人」ではないか。そしてそうだとすれば、美しいものが「快い」のは、その美しいものを「眺める人にとって」であるという理解したプラストスは正しかったのではないか。

たしかにそういう意味でならばプラストスは正しかったのである。しかもそれはソクラテス自身の言葉によっても保証されている。ソクラテスは「美しい身体」は「それが見られる（眺められる）ときに、見る（眺める）人をよるこばせる」から「美しい」と言われると言っている。ではプラストスの誤りはどこにあったか。それはかれが「見る

ポロスは論駁されなかったか

（眺める）人」を「外から眺める人」と解釈し、「自分自身を見る人」を排除した点においてである。

これは、ある意味では、カーンが指摘していたことでもある。というのはカーンは、関係項（だれにとって快いか）は「法」や「風習」にしたがって生活し、「学問知識」の学習研究にたずさわる「当事者」であって少しも構わないこと、それどころかこれらの場合にはむしろそう考えるほうが自然であること、したがってソクラテスが後の論駁の段階で、不正をすることが「不正をする人」当人にとって苦痛であるかと問うたのは正当な問いであったことを、正しく論じていたからである。ただ、カーンが誤ったのは、「眺める人 (viewer)」と「当事者 (participant)」とが互いに相容れない限定であると考えこの点ではかれはヴラストスの考えにしたがっている）、そこから、そもそも関係項を限定すべきではなく、不定とすべきであると考えてしまったからである。

行為の美醜を行為者自身が判定する場合 ヴラストスは「美しい」あるいは「醜い」と見るのは、他人が見るのであつて自分が見るのではないと考えてしまった。しかし、自分自身を、あるいは自分に属する何ものかを、自分が見て「美しい」とか「醜い」と判断することはいくらかでもあることである。たしかに美しい身体を「美しい」と見、その判定するのは多くの場合その身体の持ち主ではなく、それを外から眺める他人であろう。「色」や「形」や「声」や「音楽」についてということになればもう絶対に、それを「美しい」と判定するのはそれを眺める（あるいは観賞する）他人であるとしか考えられないと、ヴラストスなら言うかもしれない。しかしはたしてそうだろうか。たとえばナルシストは、自分の身体を鏡に映して、それを「美しい」と思うのではないだろうか。あるいは逆に、最近ふとり過ぎの自分を見て「醜い」と思う人はいないだろうか。さらに「色」や「形」にしても、自分の顔色や体型の美醜を見て、食事や生活を改めなければならないと考えるということがある。そして音楽家は、自分の「声」や「音楽」の美

醜を自分で聞き分けながらコントロールし調音するのではないか。「法」や「風習」や「学問」の美しさについては、すでにカーンが同様のことを指摘していた。

しかもいまのわれわれにとって最も重要な問題は、ポロスとソクラテスにとって問題であったこと、すなわちたとえば「不正なことをする」ことは「醜い」という「行為」の問題である。われわれは美しい行為を選び、醜い行為を避ける。このとき、「美しい」あるいは「醜い」と判定するのは自分の行為についてであり、それを自分が自分で判定するのではないだろうか。もちろんわれわれは他人の行為についても同様に判定する。しかし自分の行為についても判定するのである。行為する自分が自分の行為の判定者となることは当たり前のことである。

われわれはたとえば、自分のやろうとした行為が「醜い」ことに気が付くことがある。それを「醜い」と判定するのはもちろん自分である。そのときわれわれは、その行為をすることは自分にとって「苦痛」であると思うこともあるのではないだろうか。そしてそれゆえに思い止まることもあるのではないか。もちろんこれとは別に、その醜い行為をすることが自分にとって「損害」であると考えて、それを思い止まる場合もあるだろう。たとえばその行為によって世間の信用を失うおそれがあるような場合である。しかしいま言ったように、醜い行為をすることがわれわれ自身にとって「苦痛」であるがゆえに、それを思い止まるということもあるのである。このときの「苦痛」は言うまでもなく「自分にとって」の苦痛であろう。

こうして、美しいものが「快い」のは、それを「美しい」と言う人すなわち判定者にとってであるという当然のことを明確に把握するとき、それが「眺める人」でも「当事者」でもありうること、また「他人」でも「自分」でもありうることを、われわれは理解できるようになる。そして、ソクラテスが美しい身体はそれを眺める人にとって「快

ポロスは論駁されなかったか

い」のではないかと問うたときも、また不正な行為はそれをなす本人にとって「苦痛」であろうかと問うたときも、どちらも「美しい」あるいは「醜い」と見る「判定者」にとつての快苦が問われていたこと、そして「美醜の判定者」こそが本来の関係項であつたことが分かつてくれば、ソクラテスとポロスの論理に虚偽を見るいわれの無いことも、次第に分かつてくるのではないか。

ポロス自身が答え手であり判定者であること テキストに戻ろう。ポロスは「不正をすることは不正をされることよりも醜い」と答えた。これにもとづいて、かれは「不正をすることは不正をされることよりも苦痛においてまさるか、損害においてまさるか、あるいはその両方においてまさる」ことを認めさせられた。ここでソクラテスは「不正をすることのほうが不正をされることよりも苦痛の点でまさっているのか。つまり、不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じているのか」と問い、ポロスは「いいえ、ソクラテス、少くともそういうことは、決してありません」と答えたのであつた。

ヴラストスの疑惑の端緒は、推測するに、ソクラテスがこの最後の問いの中で「つまり」と言い換えている、その言い換えにあつたと言つてよいだろう。ヴラストスはたぶん、初めてこの対話を讀んだとき、ソクラテスの「不正をすることのほうが不正をされることよりも苦痛の点でまさっているのか」という問い方については許容できても、¹⁰それを「つまり、不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じているのか」と言い換えることは許容できないと直感したのであろう。というのもこの直感は、ヴラストスと共に、おそらくわれわれの多くが共有するものだからである。その直感とは、すでに何度も繰り返して触れたこと、すなわち「苦痛」がだれの（あるいはだれにとつての）苦痛であるか、つまりだれの苦痛を論じるべきかが、ここでは明確でない、あるいは混乱しているの

はないかという疑いである。この疑いの内容は、おそらくつぎのように説明できる。まず「不正をすることは不正をされることよりも醜い」という考えについて、われわれの多くは、これをもともと世間の人々の考え、いいかえれば社会の通念であると考えてるのではないだろうか（ヴラストスの「眺める人」も、おそらく世間の人々のことであろう）。そしてもしそうだとすれば、ソクラテスの問いは「不正をすることは不正をされることよりも、社会にとって苦痛であるか」と問われなければならない。¹¹なぜなら、もし「醜い」と言うのが社会の人々なら、苦痛を感じるのも社会の人々であろうからである。ところが、ソクラテスの実際の問いは、ここに見るとおりの問いであり、結局のところ「不正をすることは不正をされることよりも、不正をする人たちにとって苦痛であるか」という問いになってしまっている。かりにもソクラテスのこの問いが正当な問いになりうる場合があるとしたら、それは初めに「不正をすることは不正をされることよりも醜い」と判定したその判定者が不正をする人たち自身であるときであり、そのときに限られる。しかしそんなことはどこにも言われなかったし、またそんなことはそれ自体としても理解できない。と、これがわれわれの直感の大方の内容ではあるまいか。

われわれのこのような直感にはある種の自然さがある。その自然さについては、別に改めて考察するに値するだろう。しかしこのわれわれの直感的解釈は、結局間違っている。その誤りについては、部分的にはすでにわれわれのこれまでの考察の中で触れられてきた。しかしわれわれのこれまでの考察が、特にテキストのこの部分についてどのような照明を当てることができるか、ここであらためて説明を試みよう。

このテキストにおいて、まずわれわれが確認しておかなければならないことは、いま問題になっている議論が、ソクラテスとポロスの対話という文脈の中の議論であるということ、そして「不正をすることは不正をされることより

ポロスは論駁されなかったか

も醜い」という言明は、ソクラテスの間に答えた「ポロスの意見」であること、したがってポロスがこのことの判定者であるということである。たしかに、ポロス自身がこの言明をどこまで自分の意見として言明したかについては疑わしいところがある。ポロスはこの意見を自分で言いだしたわけではなく、ただソクラテスに問いただされて答えたにすぎない。おそらくかれはこれを、ただ世間の常識に従って答えたまでであって、かれ自身が日頃思っていること、あるいは氣遣っていることを自分の意見として表明したのではない。(後にカリクレスは、ポロスがこの意見を表明したのは、ポロスが自分の思っていることをそのまま口にすることを憚ったからだと論評している。この論評はたしかに少なくとも半分は当たっていると思われる。)しかしそれでもこれは、ポロスの答えであり、ポロスの言明である。したがってかれは、この対話において、これを自分の意見としてこれに責任を持たなければならない。これが世間の通念であろうとなかろうと、答えたのはポロス自身なのである。すなわちポロス自身が「不正をすることは不正をされることよりも醜い」ことの判定者である。

六 「不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じているのか」

さてわれわれの考察によれば、何か「醜い」ものがだれかにとって「苦痛である」としたら、それはそれを「醜い」と判定した人にとって苦痛であるはずであった。しかるにいまポロスは、「不正をすることは不正をされることよりも醜い」と判定した。したがって、これにつづいてポロスが必然的に認めなければならないことは、「不正をすることは不正をされることよりもポロスにとって苦痛においてまさるか、損害においてまさるか、あるいはその両方において

まさるかの、いずれかである」ということである、ということになる。そしてさらにこれにつづけてソクラテスが問うべき問いは（最初にこれを問うべきか否かはともかく、その問いの一つは）、「不正をすることは不正をされることよりもポロスにとって苦痛においてまさるか」という問いであることになるだろう。しかるに、ソクラテスによって実際に問われた問いは、すでに見たとおり「不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じているのか」という問いであった。この二つの問いは、「不正」と「苦痛」を問題にしているという点を除けば、少なくとも一見したところではまったく異なる問いであるように見える。われわれがこの二つの問いを同一の問いとして把握する可能性はどこに見いだされるか。

この二つの問いの違いは、前の問い（すなわち、問われるべき問い）では「ポロス」が苦痛を感じるかどうかの問題になっているのに、後の問い（すなわち、実際のソクラテスの問い）では「不正をする人たち」と「不正をされる人たち」の苦痛が問題にされているところにある。これを言い換えてポロスの立場から言えば、前の問いではポロス自身が苦痛を感じるかが問題であるのに、後の問いでは、ポロスから見れば他人あるいは第三者である「不正をする人たち」と「不正をされる人たち」の苦痛が問題にされているように見える点である。だが、この人たちは、はたしてポロスとは無縁の人たちだろうか。

ここでわれわれはあえて迂路を取り、ソクラテスとポロスがこの議論を始めたのは何のためであったか、その文脈を確認するために、いまの議論が始まる直前の対話に立ち戻ってみることにしよう。その対話は次のようになっていた――

ポロスは論駁されなかったか

ソクラテス …だから、もし君に、今度は代わってぼくの質問に答えながら反駁を受けようという気持ちがあるなら、まあ見てごらん。というのも、ぼくとしてはこう思っているからなのだ。つまりそれは、ぼくだけではなく、君にしても、また他の人たちにしても、不正を受けるよりは不正を行うほうが、また裁きを受けるよりは受けたくないほうが、より悪いことだと考えているのだ、とね。

ポロス しかしぼくは反対に、ただぼくだけでなく、世の中のほかのだれ一人もそうは考えていないと思うのがね。それなのにあなたは、不正を行うよりもむしろ不正を受けるほうを選ばれるのでしょうかね。

ソクラテス そう。そして君も、また他のすべての人も、そのほうを選ぶだろうね。

ポロス いや、とんでもない。それはぼくだけでなく、あなたも、またほかのどんな人も、そのほうを選ぶ人はいないでしょう。(174B)

ここから分かることは、ソクラテスとポロスのいまの議論のそもそもの始まりは、ポロスとソクラテスが不正をすることの方を選ぶかそれとも不正をされることの方を選ぶかという問題にあったこと、つまりポロスとソクラテスの行為の選択に問題の発端があり、それを解決するためにこの議論が始められたということである。

文脈がもしそのようなものであるとすれば、この文脈の中の議論はすべて、ポロス（とソクラテス）の行為の選択という関心の圏内にあると見なければならぬ。ということは、一見他人のことあるいは第三者のことを問うているかに見える問いも、すべてポロス自身の行為の選択に関わる問いとして問われているということにほかならない。したがって「不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じているのか」という問いも決して他人事

として問われたのではなく、ポロス自身の行為の選択に関わることであり、問われたのである。つまりこの問いは、「ポロス、君自身は、不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じていると思うかね」という問いと全く同じ問いであり、さらにこの問いは、「ポロス、君は、もし君自身が不正をするとしたら、君自身が不正をされるとした場合よりも、より大きな苦痛を感じるだろうか¹²」という問いと同値なのである。

このようなことはこの文脈に限らない。一見だれか他人のことを話題にしているように見えて、実は話はいつも自分自身のことになっているというのが、ソクラテスの対話である。¹³ このことを確かめるために、さらにもう少し前の段階までソクラテスとポロスの対話をさかのぼってみよう。われわれの議論に出てきた「不正をすることと不正をされること」の話題が初めてソクラテスとポロスの間で取り上げられることになったのは、ポロスが、ちょうど独裁者が自分の死刑にしたい者を誰でも死刑にできるように、自分の思うとおりのことが自由にできる力を持つことは羨ましいことだと言いついたことからであった(48E-49C)。ここでは「独裁者」つまり「不正な仕方で人を死刑にする人」のほか、「不正な仕方で死刑にされる人」、また「正当な仕方で人を死刑にする人」、「正当な仕方で死刑にされる人」などについて、そのだれが羨ましく、だれが羨ましくないか、だれが哀れで、だれがさらに不幸であるかが、ソクラテスとポロスの間で論じられた。そしてまた「独裁者」の地位につきたいか、つきたくないかが問われていた。ここに話題にされた人々は、ソクラテスとポロスから見れば、一見なるほど他人であり、第三者ではある。しかし、ソクラテスとポロスにとってそのだれが羨ましく、だれが羨ましくないか、そしてだれのようにになりたいか、だれのようになりたくないかという話となれば、それはすでにまさにソクラテスとポロスにとっての話であり、彼ら自身がそのような人々の幸福と不幸についての判定者になっていることは明らかだろう。つまりここでも、もしソクラテス

ポロスは論駁されなかったか

とポロスが独裁者の立場になったなら、それがソクラテスとポロスにとって幸福だろうか不幸だろうかということが本来の論題なのである。

こうして、一見したところでは第三者のことを問うているかに見えた「不正をする人たちのほうが不正をされる人たちよりも苦痛を感じているのか」という問いも、その実質においては、「不正をすることは不正をされることよりも醜い」と判定した、そのポロスにとって「不正をすることは不正をされることよりも苦痛であるか」を問うものであったことが理解できることになる。そしてそれが理解できれば、ソクラテスのこの問いに何らの論理的虚偽も含まれていないことを、ヴラストスも同意するだろう。ヴラストスの疑義は、文脈が読みとれば解消するはずのものであったのである。¹⁴

七 なぜポロスは論駁されたか

ソクラテスのポロス論駁の過程に、ヴラストスの指摘した論理的虚偽が存在しないことは、以上によって明らかにした。したがって小論のさしあたりの課題は達成されたと言つてよいであろう。ポロスは論駁されていないというヴラストスの主張は彼の思い違いであり、ポロスは論駁されていたのである。

だがしかし、それではなぜポロスは論駁されたのか。われわれの解明は、まだそこには及んでいない。われわれはまだ、どういうわけかポロスは論駁されたいということを知るのみで、その原因ないしは理由を見極めていない。われわれはたしてこのままで、ソクラテスとポロスの対話を理解したと言えるだろうか。というのも、考察

の初めに触れたように、ポロスの主張はわれわれの常識と一致するものであると思われ、むしろソクラテスの主張の方が非常識であるように見えたのではなかったか。われわれはいま、そのわれわれの常識を覆すことができるほどまでに、ソクラテスのポロス論駁に納得することができたろうか。われわれはもう一度だけ、二人の対話を見直そう。いまようやくわれわれはヴラストスの懷疑から立ち直り、再びソクラテスとその対話への信頼を取り戻して、ソクラテスとの共同の探求に立ち戻ろうとしているのである。

まず、ポロスが論駁された原因は、彼の無知にあるであろう。もし、すでにわれわれが確認したように、ポロスがソクラテスによって正当に、真の意味で論駁されたのだとすれば、それは、それまでのポロスの心の内にあった何らかの欠陥が表面化したことを意味するであろう。その欠陥をわれわれはある種の無知と呼んでよいであろう。それは、必ずしも情報量の不足ではないかもしれず、また論理的知識の欠如でもなく、むしろ事柄の無理解と呼ぶべきものかもしれない。ではとにかく、それはどのような無知か。

ポロスのその無知は、ソクラテスの論駁の終わりにには、ポロスの意見の中の矛盾として露わになった。すなわち、ポロスの(1)「不正をされることは不正をすることよりもわるい」「損害であり、不幸である」という意見と、(2)「不正をすることは不正をされることよりも醜い」という意見の間の矛盾である。ソクラテスは、ポロスの意見(1)を論駁するために、まずポロスの意見(2)を聞き出し、ここから論理的に意見(1)の否定言明すなわち意見(10)を導き出して見せた。ポロスはその過程の論理的必然性を認め、自分の意見(1)が論駁されたことを認めたのである。

ここから分かることは、論駁される前のポロスは、ポロスの意見(2)が彼の意見(1)の否定(すなわち意見(10))を論理的に含意することを知らなかったということ、つまりもし「不正をすることは不正をされることよりも醜い」「卑劣で

ポロスは論駁されなかったか

あり、非難に値する」ならば「不正をすることは不正をされることよりも悪い」「損害であり、不幸である」ことになることを、知らなかったということである。これに対してソクラテスの方は、この論理的関係をどうやら初めから知っていたらしい。というのは論駁を始めるに当たって、ソクラテスがポロスの「不正をすることは不正をされることよりも醜い」という意見(2)を聞き出したとき、ソクラテスはそれにつづけて「それではまたその方がより「わるい」ことでもあるのだ。いやしくもより「醜い」のであるからには」(474C8-9)と言っていたからである。そしてさらにそのつぎのソクラテスの言葉(C9D2)からすれば、おそらくソクラテスは、「美しい」「立派であり、称賛に値する」ものと「よい」「利益であり、幸福である」ものは同じものであり、「醜い」「卑劣であり、非難に値する」ものと「わるい」「損害であり、不幸である」ものは同じものであることを知っていた¹⁵。ところがポロスはそれを知らなかった。そこにポロスの無知があり、ポロスが論駁された原因があった。

しかしこの無知は、無知とは言っても、ただの無知ではない。なぜならこれは、われわれの多くがそれを無知であるとは知らないでいるほどの、深い闇につつまれた無知であり、われわれは同じ無知をポロスと共有しているからだ。というのも、われわれの多くはポロスの意見(1)と意見(2)に同意するだろうからである。(われわれ研究者の多くが、ソクラテスの論理に瑕瑾を探り出そうと躍起になるのも、またわれわれが、不正の存在は、社会とその法にとつては醜くまた損害であろうが、個人にとつての損害ではないなどと賢しらを言いたくなるのも、われわれがポロスと心情を共にしているからではないと言い切れるだろうか。)

この無知の闇の深さは、ソクラテスがやがて(477A以下で)示唆することになるように、それがわれわれの目に見えるがたい「魂」のあり方にかかわる無知であることによる。ソクラテスとポロスは「不正をすること」と「不正をさ

れること」の「わるさ」「損害、不幸」について語っていた。このうち後者の「不正をされること」のわるさは、財産や名誉を奪われたり、身の安全を侵されたりすることであるから、われわれにも理解でき、ポロスにも理解でき、そしてソクラテスにも理解できる。ここで問題になっているのは、いわば目に見える「所有物」だからだ。そしてもしもわれわれの目に、この所有物の授受と奪だけしか見えないとしたら、「不正をされること」は所有物を奪われること、すなわち「わるいこと」「損害」を与えられることであり、「不正をすること」は所有物を奪うこと、すなわち「わるいこと」「損害」を与えることであつて、そのほかのなにものでもないであらう。つまりそのときわれわれには、「不正をすること」は、どこから見ても、われわれ自身にとつて「わるいこと」「損害」とは見えないのである。

「不正をすること」がわれわれ自身にとつて「わるいこと」「損害」であるということに眼を開かれるためには、われわれ自身の生が財産と名誉と安全で構成されているわけではなく、われわれの行為によつて成り立っていることに、われわれのまなざしを向け変えなければならぬ。言い換えれば、われわれは金銭や地位のために生きているのではなくて、なんらか意味のある生き方をしたいと思つて生きているのだということに気づくことが必要になる。そのことに気づけば、われわれは、「不正をすること」が、他人の所有物を奪ひ取ることであるとともに、同時に自分自身にかかわる行為でもあることに気づくであらう。そしてその不正行為が自分自身の生きかたを破壊することに気づくことにもなるであらう。「不正をすること」が自分にとつてわるい「損害」であり、不幸である「こと」であるとは、そのことを指す。これに対して、「不正をされること」は被害であつて行為ではない。だから、それは所有を侵されることではあつても、魂を侵されることではない。われわれの生への被害は間接的なものに止まるのである。

ポロスは論駁されなかったか

八 ポロスの中の希望

したがって、ソクラテスが「不正をすることは不正をされることよりもわるい」「損害であり、不幸である」と言うとき、彼は、行為と魂に関わるわるいことと所有物に関わるわるいことという、異なった二つの領域のわるいことを比較しているのである。だから彼の言葉が理解できるためには、その両方の領域が見えていなければならない。したがってもちろん、魂の領域にもまなざしを向けることができればならないが、すでに述べたように、まさにそれが困難なことなのである。

しかし困難であるということは不可能であるということではない。ポロスとわれわれの無知の闇は深いが、おそらく全くの暗黒ではない。プラトンがどこかで言っていたように、われわれ人間の住みかは、どこか知と無知の中間領域にあるのであろう。われわれも、ポロスも、なにか知の断片のようなものを心の中に持っている。ソクラテスがポロスの心の中に探り出したそのような断片こそ、「不正をすることは不正をされることよりも醜い」というポロスの意見(2)だった。このポロスの言明を、そのままポロスの知の証と見なすことはできない。なぜならポロスは、この言明の中に言われている「不正をされること」がどういうことであるかは知っていたであろうが、「不正をすること」がどういうことであり、「醜い」とはどういうことであるかを十分には知らないからである。(これらの無知についてはすでに述べた。ポロスは「不正をすること」が劣悪な行為であるがゆえに自らの魂を損なうことを知らず、またおおよそ「醜い」ことが「わるい」「損害で、不幸な」ことであることを知らない。)おそらく、若いポロスはこの言明を、彼が

生まれ育った社会から教え込まれたばかりなのである。しかしソクラテスは、ポロスの中に見いだしたこの知の断片を拠点にしてポロスの無知を論駁し、ポロスのまなざしの向け変えを図る。

その論駁は、しかし、この論拠を以てしても、直線的には進行しない。このときもしもポロスが、すでにソクラテスと共に、「醜い」ものと「わるい」「損害であり、不幸である」ものは同じであるとの認識に到達していたのなら、問題はない。もしそうなら、「不正をすることは不正をされることよりも醜い」ことから「不正をすることは不正をされることよりもわるい」ことへは一直線に導かれる。しかしポロスの無知は「醜い」ことと「わるい」ことの同一性を、闇に包んでいる。そこでソクラテスは、「醜い」ことから「わるい」ことを論理的に導くために、ポロスの中にあつて、「不正をすること」や「不正をされること」に伴う、あるいは伴わない「苦痛」を媒介として用い、迂路を通じて間接的な論駁を組み立てた。その次第は、すでにわれわれが見たとおりであるから、繰り返すには及ぶまい。だが「苦痛」を媒介にした論駁が、どれほどポロスの無知に適合した論駁であつたかを見ておくことは、事柄の正確な理解のために無駄ではないであろう。

ソクラテスは、「醜い」ならば「わるい」という直接的な論理をポロスが受け入れないことを知って、間接的な論理を用いた。すなわち、まず、(4)「およそ「醜い」ものは「苦痛である」か「わるい」かのどちらか、あるいはその両方である」ことを認めさせ、つぎに(7)「不正をすることは不正をされることよりも「苦痛である」ことは「ない」ことを認めさせ、これらからの論理的帰結として(9)「不正をすることは不正をされることよりも「わるい」ことを認めさせたのであつた。われわれはいまここで、ここに用いられている二つの前提、すなわち意見(4)と意見(7)が、いずれも、いわばポロスの無知に寄り添った言明であることを、明確に認識しておくことにしよう。

ポロスは論駁されなかったか

まず、ソクラテスが言明(4)を用いたのは、すでに述べたように、「醜い」ことから「わるい」ことへの直線的な論理がポロスに通用しないためであった。言明(4)は、まずその意味で、ポロスのための言明であると言える。つまり、われわれは、言明(4)の選言形式もまたポロスの無知に寄り添ったものであることを知るべきであろう。というのは、ソクラテス自身ならば、言明(4)よりもっと強い主張である、言明(4)「およそ「醜い」ものは「わるい」ものであり、したがってまた「苦痛な」ものである」を自らの意見として表明したに違いないからである。¹⁶なぜなら、「醜い」ものは「わるい」というのがソクラテスの考えであったであろうことはすでに述べたとおりであり、もう一方の、「わるい」「損害で、不幸な」ものであれば「苦痛である」ことは万人が認めるであろうからである。(そしてソクラテスは、言明(3)の代わりに、もっと強い言明(3')「およそ「美しい」ものは「よい」ものであり、したがって「快い」ものである」を表明したであろう。)言明(4)は、この意味で、ポロスの無知に適合するように緩和されている。その理由はいくまでもなく、ポロスにはソクラテスの言論を受け入れるだけの知力つまり理解力がないということに尽きる。(ただし言明(4)は(そして言明(3)も)、この緩和によって虚偽の言明になるわけではない。)

つぎに言明(7)についてはどうか。ヴラストスにとって、そしてまたわれわれにとって、何度となく躓きの石になったこの言明こそ、なににもまさってポロスの言論であり、また大多数のわれわれの言論であって、かならずしもソクラテスの言論ではないことは、すでにここまで考察を進めてきたわれわれには明らかであろう。ソクラテスであれば、おそらく、「不正をすること」は「わるい」「損害で、不幸な」ことであり、したがって「苦痛な」ことであると言うより以外には、言い方を知らないであろうからである。しかしその一方でソクラテスは、ポロスが(不正をすることは不正をされることよりも)「苦痛である」ことはない¹⁷と断固として答えるであろうことを、知り抜いていたのである。

ポロスの言明(7)は、したがって、ポロスの無知(つまり誤謬)の表明である。しかしわれわれはこのことから、ソクラテスがポロスの無知を論駁のために「利用」したと曲解してはならない。われわれがもし、ソクラテスの論駁を、相手への敵意からのもの(あるいは自分の功名心からのもの)と取り、相手を言い負かすことを目指すものと見なすなら、そういう解釈が出てくるだろう。だがそれは事実と反する。ソクラテスは、論駁というものが誰よりも論駁される本人にとつての善であると考えていたのである(80b)。彼はポロスの無知を利用したのではなく、許容したのである。われわれの無知という制約の中で対話をすすめようとするとき、それは不可避なことである¹⁸。

われわれは最後に、むしろ、ポロスの中の希望にわれわれの目を向けておくことにしよう。それは他でもない、彼の、「不正をすることは不正をされることよりも醜い」という意見(2)のことである。後にカリクレスが指摘する(82d)とおり、ポロスが論駁された原因は、まさにこの言明にあつた¹⁹。しかし何度も繰り返し値することであるが、論駁は当人にとつての善(そしてつぎにその他の人にとつての善)なのである。ポロスが論駁された原因はかれの無知にあると私は言つたけれども、もしかれのところに無知しかなかったとしたら、論駁は不可能である。論駁のためには何らかの知を拠点とし、そこから出発しなければならぬ。ポロスの言明(2)は、その拠点となり得た。なぜか。

われわれはこの言明を誤解してはならない。というのは、カリクレスはこれを誤解したからである。この言明はいわばわれわれの社会の法(ノモス)そのものであるが、カリクレスはそれを、弱者の正義と見なした(83b)。なぜなら彼には、「不正をすることは醜い」という言明は、不正をされる人々の保護のために作られたとしか考えられなかったからである²⁰。

このことの誤謬は、われわれの目には、いまやすでにはば明らかであろう。「不正をすることは醜い」という社会の

ポロスは論駁されなかったか

見識は、「不正をされることはわるい」「損害であり、不幸である」ということだけを見ているのではない。たしかにそれはそのことを含むけれども、それは同時に、いやむしろ第一に、「不正をすることはわるい」「損害であり、不幸である」と教えているのである。これがわれわれの行為と魂にかかわる事柄であることは、もうこれ以上繰り返さないでもよいだろう。

ポロスはもちろん、この見識を、理解してはいなかった。しかし彼とカリクレスとの違いは、彼が、おそらく両親と社会の好意に包まれて素直に育てられたであろうおかげで、社会と人々に対する尊敬——言明(2)の心——をなお見失わずにいる点である。ソクラテスはこの一点に希望をつないで、彼を論駁したのである。

以上

註

- 1 Gregory Vlastos, *Was Polus Refuted?*, *American Journal of Philology* vol.88 (1967), p.454-460.
- 2 ヴラストスは、ポロスが論駁されたのは、ポロスの愚鈍さによる (cp. p.455: Had he brought a clearer head ...) と言っている。しかもプラトン自身がこの虚偽に気づいていないと言っている (p.459)。つまりヴラストスは、ポロスの愚鈍さをプラトンの愚鈍さに帰している。
- 3 Charles Kahn, *Drama and Dialectic in Plato's Gorgias*, in *Oxford Studies in Ancient Philosophy* vol.1, 1983, p.75-121. なお、田中伸司「ソクラテスの対話による論駁法と生き方の原理」北大哲学会『哲学』23, 1987, p.41-57 および岩田靖夫『ソクラテス』1995, p.65 がカーンの反論を支持している。
- 4 'There is no equivocation but only freedom to fill for x as appropriate in each case' (ibid. p.91), 'openness' (ibid. p.92) かしカーンは結局、ソクラテスの論理には欠陥があると結論する。たとえば、ソクラテスの議論の結論「不正をすることは不正をされるよりも

損害である」(475C7-9)は、「だれにとつてか」が開かれた、弱い結論のままであれば有効であるが、ソクラテスが475D8で実際に限定してしまっているように、「行為者(あるいは被害者)本人にとつて」と限定してしまつたのは論理的に誤謬であると論じている (ibid. p.91-92)。カーンはこうして、結局のところ、本質的にはウラストスと全く変わらないプラトン批判を繰り返している。

5 カーンは、関係項は「自由に開かれている」が、それに「後から限定を加える」と論理的に問題が生ずると考えている。cp. 'valid inference ... only if ... with the open ellipse... And there is nothing in the premises strong enough to justify this particular conclusion' (91-92).この点からすれば、かれはここでは関係項を置き換えてはならないということを認めているように見える。しかし、関係項が「自由に開かれている」というのは関係項が存在しないということ、あるいは設定されていないということであろう。そうだとすれば、それにもかかわらずそれを自由に置き換えてはならないというのは不合理である。そもそも関係項を不定としたのがかれの間違いだったのである。

6 何かが「美しい」と思うときには、必ず「快い」と感じていると言わなければならないのではないかという疑問が提出されるかもしれない。しかし「立派である」と思うときにも必ず「快い」と感じているとは言えないだろう。「立派だ」とは思うが、自分は好まない(あるいは、自分はそうしたいとは思わない)というような場合である。(また「醜い」が「快い」という場合もある)。

ソクラテス(プラトン)はここに目をつけて、あの議論を構成したにちがいない。つまり、ポロスの(そして多くの人々の)正義(と不正)についての考えがまさしくそのようなものであることを見て取つたのである。

この問題は *xaión* というギリシャ語の訳語の問題であるとも言えるけれども、まさにその訳語の問題を考えるとき、同時にわれわれは「美醜」「善悪」「利害」「快苦」「正義と不正」などといった事柄の問題を考えることを余儀なくさせられる。*xaión* を「美しい」と訳すべきか「立派である」と訳すべきか。前者を選ぶなら、それは「快い」ものであることになろう。しかし後者なら、必ずしも「快い」ものではないだろう。*xaión* と言つた人はだれであつて、その人はともとういう考えて *xaión* と言つたのか、その人以外の一般の人ならどうか、等々のことも問題になるだろう。また、言葉の用法はどこで決まるか、ギリシャ語の対話で問題になることが日本語の対話でも問題になるか、等々も重要な問題であろう。

7 厳密に言えば、「美しいものを見る人」という記述と「美しいものを見て」「美しい」と思う、「美しい」と言う人」という記述は同じではなく、いまの場合は後者を取るべきである。ソクラテスは、このことをポロスに問うとき、「君は、すべての美しいもの、たとえ

ポロスは論駁されなかったか

は身体や色や形や声や仕事を「美しい」と言うとき」「なにもものにも目を向けずに「美しい」と呼ぶのか」(47D5)とか、「君が立派な美しい身体を「美しい」と言うとき」(47D6)と表現している。

この違いは、美しいものを見ても「美しい」とは思わず、したがって「美しい」と言わないということが、いくらでもありうることから理解できるだろう。美しいものを見て「快い」と感じるのとは、それを「美しい」と思う人だけであって、美しいものを「見て」も(或いは「眺めて」も)それを美しいと思わない人にとっては、そのものは「快い」とは感じられない(だから「美しい」と思わない)のである。

8 ソクラテスは *ἐν τῷ θεωρεῖσθαι τοὺς θεωρητάς* (47D8-9) と言っている。*θεωρεῖν* は競技の観客についても用いられる語であるから、たしかに「眺める」(ヴラストスは *view* を用いている)という語感がある。しかしソクラテスは「身体」の例であるからこの語を選んだのにすぎないだろう。これを「外から眺める」という意味に限定して受け取ったのはヴラストス自身である。かれは、後の「法」や「風習」や「学問」についても *contemplate* (p.457, 1.5) という、距離感のある語を用いて理解している。しかし他方、*see* も用いている (*ibid.*)。

9 カーンはこのことを正しく指摘している (*ibid.* p.90)

10 実際の論文では、ヴラストスはこれを許容せず、むしろこの箇所でソクラテスが「眺める人にとって」という限定を省いてしまったことこそが重大な誤謬であると言っているのであるが…。

11 Dods, *Plato, Gorgias*, 1959 Oxford, p.249; Kahn *ibid.* p.91, note 31.

12 *ἀναποδοῖν* (475C2) は「不正をしている人たちは不正をされている人たちよりも、より大きな苦痛を感じているのだろうか」と解する訳(ほぼ加来氏訳に従う)が最善であると思われるが、「不正をする人たちは不正をされる人たちよりも、より大きな苦痛を感じるのだろうか」と解することもできよう。後者は、この問いを、自分がもしそのような立場に立ったときのことを思い浮かべて答えるように求めている問いと解するものである。

13 例えば、『ラケス』187E-188Aを参照。

14 対話は文脈によって成り立つものである。相手にイエスかノーかの答えを要求するソクラテスの対話については、とりわけそのことが言える。相手が代われば答えも変わる。それは同じ言明についての理解(いいかえれば解釈、すなわち文脈)が個人によって異なる

からである。ヴラストスはそのことに気づいておらず、誰にとっても論理は同一であると思ひこんでいた。しかし論理の正誤も、言語という記号を用いる以上、個人の理解の仕方によって変わるものである。また、ヴラストスの申し立てた異議は、「自分だったら論駁されないぞ」という異議であるから、カリクレスがポロスの受け答えに対して異議を申し立てたのに等しい。そのように個人によって言葉の解釈が違ってくるからこそ、ソクラテスは対話という方法を選ったのである。

また私はここまでの議論で、「不正をする人たちが不正をされる人たちよりもっと苦痛を感じているのか」というソクラテスの問いが、実は「ポロス、もし君自身が不正をするとしたら、君自身が不正をされるとした場合よりも、より大きな苦痛を感じるだろうか」という問いであつたのだと主張した。これはもちろん、ソクラテスの問いが、文脈からしてそう解釈されうるといふ意味であり、かつポロスもそう解釈したはずだといふ意味での主張である。したがってこの解釈は、もしこのような文脈をどうあつても認めようとしないう人々がいれば、そのような人々の前では無力である。しかし言葉は記号であるから、最後は了解に支えられている。すべてを言葉にすることはできない。そこに対話の限界と無限の可能性が共に成立するのである。

15 さらに、『クリトン』²⁰を参照。

16 ただし、「苦痛な」ものであれば「わるい」ものであるとか、「醜い」ものであるとかいうような、逆の論理は成立しない。後出の「快い」ものについても同じ。

17 もしソクラテスが答え手であつたらどう答えたかを想像するのは難しい。ソクラテスは、「不正をする方が不正をされるよりも苦痛に
おいてまさるか」と訊かれれば、イエスと答えるだろう。(彼にとっては不正をすることは苦痛であるから、不正をしないだろう。)しか
し「不正をする人たちは不正をされる人たちよりも苦痛を感じているか」と訊かれれば、ノーと答えるだろう。そして、「ただし自分
にとつては苦痛である」と付け加えるだろう。つまりソクラテスの場合には、ポロスの場合と同じ話にはならないと思われる。——もつ
とも、これらのことを想像するのは無意味であろう。ソクラテスに対してはそのような論駁はもともと不要なのだから。

18 ソクラテスにはポロスのこの無知を自らのこととして引き受ける用意があつたと思われるが、そのことは『ゴルギアス』の中では見
えにくい。他のアポリア的対話篇から知るべきであろう。

19 ヴラストスはこの見解を論駁するために彼の論文「ポロスは論駁されたか」を書いたのであるが……。彼の論文の冒頭を参照。

20 この点で西洋思想史上の数々の「社会契約論者」たちはカリクレスと意見を同じくしている。またプラトン研究者たちも、「醜い」の

ポロスは論駁されなかったか

は社会にとってであつて個人にとってではないと主張する多くの人々が、これと同じ意見である。

付記

以上の小論は、一九九九年一月五日に東京大学山上会議所において開かれた、科学研究費補助金による「対話と論争の合理性の起源と構造に関する研究」の研究会での発表原稿に手を入れたものである。その折り、研究会出席者の、天野正幸、今井知正、荻野弘之、加藤信朗、高橋久一郎、山本 巍、渡辺邦夫の諸氏から寄せられたご批評に、心からの感謝を申し上げる。いまここでは、そのうち特に天野氏から寄せられた質問についての考察を付記する。

天野氏の質問は、ほぼ次のようなものであつた。「醜いものを見るときの苦痛はある種の苦痛（不快感）であるのに対して、不正をされるとき苦痛（たとえば拷問を受ける苦痛）はそれとは別の種類の、醜さとは無関係な苦痛であろう。ソクラテスがこれらと同じ苦痛として比較して論じているのは、やはりおかしいのではないか。」私は、これは鋭い指摘であり、またこの疑惑は合理的であると思う。しかし天野氏のこの読みは一面的であると思う。

たしかに、ポロスが「不正をする人たちが不正をされる人たちよりも苦痛を感じていることはない」(7)と答えたとき、おそらくかれは「不正をされる人たちのほうがずっと苦痛を感じる」と考えてそう答えたのであろう。そしてその苦痛とは、財産を奪われたり、名誉を傷つけられたり、暴力を受けたりする苦痛のことを思い浮かべていたのであろうと推測される。もしもこの推測が正しいとすれば、たしかにそれは、醜いものを見て感じる苦痛とは別の種類の苦痛である。少なくともそれは、「醜い」という判断の根拠となる苦痛ではないだろう。そうだとすれば、いま必要とされ

ている、「ゆえに苦痛のゆえに醜いと言われるのではない」という推論を導く力は、言明(7)にはないことになる。そのときポロスの推論はたしかに虚偽となる。しかしこれは、天野氏とわれわれがポロスの心の中を推測して得た読みであつて、対話の言葉の上では、どこにも現れていないことに注意しなければならない。つまり同じ対話について、これとは別の読みが可能なのである。それを次に見よう。

今度はソクラテスの問いの方に注目してみよう。ソクラテスの問いは、「不正をすること」と「不正をされること」を「二つの醜いこと」(cp.475a8)と捉えた上で、これらのどちらがより苦痛であるかを問うたのだと解釈する方が、文脈から見て自然である。つまり「不正をされること」も「みつともないこと」であり、これはこれで恥ずべき、醜いことであると考えられる(483A-B)。不正をされる人が自分のそのような醜さに苦痛を感じるということは、十分にありうることなのである。そして他方、不正をする人の方も、自分の醜い行為に苦痛を感じることが十分にありうる。問われたのがもしポロスではなくてソクラテスであつたなら、ソクラテスは「不正をする方が不正をされるよりも苦痛である」と答えたであろう。このように理解すれば、ここでは終始、醜さに関わる苦痛が問われていたのだということになる。そしてそうだとすれば、ソクラテスの問いの方には虚偽はないことになる。もちろんこれとて推測である。対話の言葉にはどこにも現れていないからである。しかしこの推測も、天野氏の推測と同じくらい自然で無理のない推測であろう。

以上のことから出てくる結論は、ソクラテスとポロスの対話を、たとえば上述の後者(われわれの推測によるソクラテス)の心をもつて解釈すれば、虚偽は存在せず、前者(われわれの推測によるポロス)の心をもつて解釈すれば、虚偽が含まれるということであろう。つまり、虚偽が含まれるか含まれないかは、われわれの推測と解釈によつて決

ポロスは論駁されなかったか

まるということである。というより、それによらなければ決定できないということなのだ。

このときわれわれの話はどういうことになるだろうか。もし、われわれが推測したように、ソクラテスは虚偽を犯さず、ポロスは虚偽を犯したのだとしたらどうなるか。われわれは、ソクラテスはポロスとの対話を別の正しい仕方
で運ぶべきだったのであり、ソクラテスはポロスに虚偽を犯させるべきではなかったのであると結論すればよいの
だろうか。ポロスの虚偽が彼の人柄とまなざしと無知から生まれたものであっても、なおそのように言わなければなら
ないのだろうか。天野氏が提起された問題から、われわれはあらためてソクラテスの対話とは何であつたのかを考え
させられることになりそうである